

モロッコ国際ブックフェアを訪問して

高橋理枝

各国の国際ブックフェアは、アジア図書館にとっても資料収集の好機である。途上国出版の書籍は現地に出張して収集することも多いが、短い出張期間に訪問できる書店の数は限られている。国際ブックフェアでは開催国の主要な出版社が一堂に会し、地方の研究機関や収集が難しいNGOや省庁などのいわゆる灰色文献も入手できる。また近隣諸国の出版社も出展するため、数日で効率よく多くの資料を収集できる。

今年で23回を数えるモロッコの国際ブックフェアは、首都のラバトではなく、モロッコ経済の中心であるカサブランカで開催された。地中海に面したハサン2世モスクのすぐ隣の展示場では、12万タイトルの資料が扱われ、約34万6000人が訪問したという。

筆者がかつて訪問したシリアの国際ブックフェアはお祭りのような色彩が強かったが、カサブランカのブックフェアでは、会場内外の子どもの多さに驚かされた。多くの学校でブックフェア訪問を授業に取り入れているらしく、どこもかしこも先生に引率される児童の列や、児童書とその付録?に群がる子どもたちでごったがえしていた。入場券売り場も平日は「一般」(約120円)と「学生」(約60円)に分かれており、これはカサブランカでは恒例の「ブックフェア遠足」であることがうかがわれた。ただし休日になると会場の様相は一変する。大人の比率がぐんと高まり、入場券売り場も「一般」のみになる。それでも小さな子どもを連れた家族連れの様子はよくみかけた。

もちろんブックフェアの本は児童書ばかりではない。記者発表によると、児童書は17%を占めるが、文学が24%で最も多く、社会科学が16%、宗教書8%、科学7%、哲学と言語はそれぞれ6%、残りが経済、芸術、歴史、地理となっている。この数字は、モロッコでは一般書



店でも社会科学のしっかりした資料を多数扱っているという筆者の印象を裏付けてくれ

会場内風景



会場入り口の検査。ほとんどの人がノーチェックで、とてもテロが防げそうな検査ではなかったが、たまに止められる人も

た。宗教書はもう少し多い印象であったが、壮麗な装丁をほどこされた宗教書の存在感が大きかったためかもしれない。

ブックフェアは、これまで知らなかった出版社を見つけるよい機会でもある。今回は、判例集を出版している最高裁判所や、地方の大学出版部、王立アマジグ文化機構(アマジグはベルベル人の自称)などを知ることができた。ただしブックフェアでは画一化されたブースのため、通常なら書店の質の判断材料にする店舗の規模、店内や従業員の対応の様子などがわからないのが残念なところだ。実際の店舗を訪問してみたいと思う書店もいくつかあった。また近隣諸国の書店は、売れ筋の本しか持ってきていないのか、筆者が以前訪問した店舗ではもっと違う品揃えだったが、と首をかしげたくなる書店も散見された。

混雑した会場内で、ブースを移動するたびにどんどん増える購入資料をどう持ち運ぶかなど課題は多いが、やはりライブラリアンにとってブックフェアは多くの資料と出版社に出会えるうれしい機会である。中東最大で桁違いの規模といわれるカイロ・ブックフェア、近年出版に力を入れているシャルジャのブックフェアなど、行ってみたいフェアはまだまだある。

ちなみにモロッコのブックフェアでは、久しぶりに「珍しい東洋人」扱いを受けた。大人からされると腹立たしいが、相手が子どもだと不思議とそれほど嫌な気持ちにならずに済むものである。遠慮のない子どもたちに、写真を撮らせてほしいとか、この韓流スターを知っているかとか、あれこれまわりつかれたのも、楽しい思い出である。

(たかはし りえ/アジア経済研究所 図書館)

《参考ウェブサイト》

- ① <http://www.salonlivrecasa.ma/fr/index.php/actualites/213-communication-de-presse-bilan-de-la-23eme-edition-du-salon-international-de-l-edition-et-du-livre-2017>



大型バスを降りて先生に引率される児童。後ろにみえるのはハサン2世モスク